

夫の転勤で渡米し、テキサス州で暮らすA子さん(42)が、胸のしこりに気づき、乳がんと診断されたのは二〇〇二年の年明けだった。MDアンダーソンがんセンター(同州ヒューストン)で精密検査の結果、骨への転移が判明。手術は不可能だった。

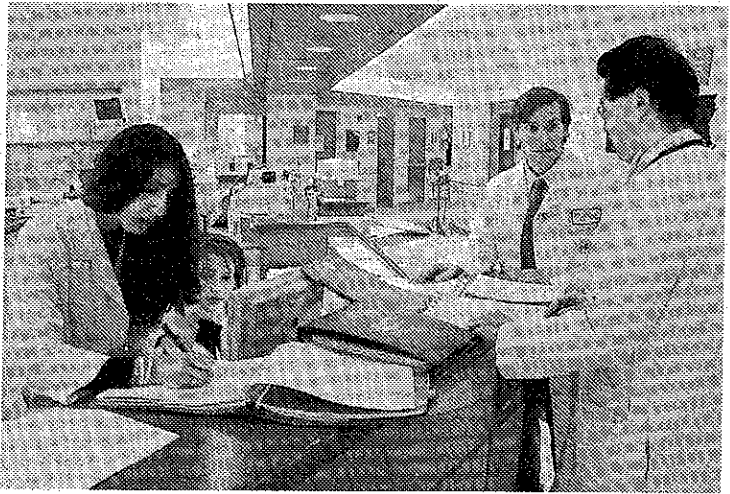
「可能な治療法は、抗がん剤かホルモン療法。抗がん剤を専門とする臨床腫瘍医の主治医は、薬の副作用などを克明に記した資料を手渡し「質問にはすべて答えませんが、最後はあなたが選んでください」と告げた。夫と話し合い結論

吐き気、脱毛、発熱……。読めば読むほど怖くなった。告知のショックも消えない状態では、治療の選択など思いも寄らない。突き放されたように感じ、「時間をください」と言うのが精いっぱいだった。

実は主治医も、A子さんの相談ののった同センター助教教授の上野直人さんも、

アメリカ新事情

1□□□□



回診を前に打ち合わせをするMDアンダーソンがんセンターの医療チーム

患者自ら治療法選ぶ

最善と考える治療法は胸の内にあった。だが、押しつけになると考え、あえて言わなかったのだ。

患者にがんを告知し、治療法を選択させる米国流。「医療訴訟恐れ」との指摘もあるが、上野さんは「自

分の病状を把握し、治療の決定にかかわらなければ、本心に望む治療にはたどり着けない」と語る。

夫(43)と話し合っ出て出した結論は、「最も強い抗がん剤治療」。主治医が最適と考えた方法だった。

MDアンダーソンがんセンター42の医療関連施設が立ち並ぶ「テキサスメディカルセンター」の中心に位置する州立病院。職員数1万2000人。がん医療で全米一の評価を受け、年6万人の患者が訪れる。2006年までに陽子線治療センター、がん予防センターなどが稼働。訪米して受診する日本人も増えている。

夫婦が治療と真剣に向き合うことで、がんとの闘いの意味が明確になった。「小学生の娘のために、一日でも長く生きよう」

を取り除き、患者が前向きな気持ちで闘病できるよう全力で支える。

A子さんは、外来での抗がん剤点滴後、激しい吐き気に襲われた。それも副作用を抑える薬で乗り切り、手の甲が荒れる副作用には皮膚科医が対応した。

家族を心の励みに
がんは治療で縮小し、今も外来治療を続ける。「家で娘と過ごせたことが大きな励みになった」と言う。帰国しても、「外来治療できる病院を探します。病人のような気持ちにならないから」。

夫は「統計を見ると、妻はもう何年も生きられないかもしれない。でも最善を尽くしたい」と話す。厳しい現実から目を背けない。そんな宣言とも言える言葉に、A子さんは笑顔でうなずいた。

病状をすべて知り、治療法を選ぶ。その負担を一人で背負い、乗り越えてきた夫婦の姿は力強かった。